

どんな状況でも (エペソ 1:3)

私たちが生きる人生というものは、よろしいこと、そうじゃないことが組み合わされているものです。なので普通は、その状況、状況において、どのように対処すればいいのかをテーマにして、みな頭を抱えています。ある人は、どんなによろしくない状況でも、それをバネにしてジャンプアップする人がいます。ある人は、その状況に耐えきれなくて溺れて誰かのせいにしてたり、何かのせいにして落胆して、また心の傷を負ってしまう場合もあります。皆さんは、どのように対処するのがよろしいでしょうか。言うまでもないでしょう。しかし、信者の私たちは、どのように対処すべきなのか、その状況、状況に合わせて、どのように対応をすべきなのかということの前に、それ以前にしっかり立たないといけないところがあります。それが何かと言いますと、状況がよろしいかよろしくないかなどと関係ない、それによって全く左右されない不動のいのちの祝福があるということを忘れてはいけません。ある有名な人が、『我が巨人軍は永久に不滅です』という名言を残しました。その気持ちは十分わかりますけれども、そこは永久に不滅ということは実はありえません。しかし、信者の私たちに与えられている不動の祝福、それはどのような状況なのか関係なく、永久に不滅なのです。だから、聖書にはクリスチャンの私たちに与えられている祝福のことを永遠のいのちと言います。その状況、その状況にどのように対処すべきなのかももちろん大切なんです。しかし、信者の場合は、それ以前にこの不動の祝福の中に入ること、そして、そこからスタートするかどうかは鍵です。これが世の中のそこら中の人と信者との違いです。このようにどのような状況でも、不動の祝福の中に入って、そこからスタートすることによって、この世は全く理解できない完全なる勝利の主人公になります。今日礼拝を捧げている兄弟姉妹の皆さん、本当に契約として心に固く握って信じて、この通りの勝利の主人公になっていただきたいと願います。皆さんの考え、世の中から言われるさまざまなことなどに振り回されないで、聖書の証言にしっかり目を止めてください。信者は、この時にはこういう風に、あの時にはああいう風に、はあるんでしょうけれども、それ以前に、真っ先に不動の祝福があるわけなので、そちらの方に入っていくことなのです。先々週、先週、そのサンプルとしてヨセフまたダビデの話をしました。そして、今日は皆さんもご存知のパウロのお話をしたいと思います。

パウロは今、長老さんに読んでいただきましたエペソの手紙を書いたところは刑務所なのです。パウロが今置かれている状況はどのような状況なのか。

1. パウロは刑務所に閉じ込められている最悪の状況なのです。

刑務所に行ったことがないから、その実際的な事情はよくわかりませんが、今刑務所にいる人と手紙のやりとりをしているので、少しはお話を聞いていたり、また一般的に映画などを見ながら大体はわかっています。この刑務所という状況は、自由が全くないところなのです。自分の意志が通じないところが刑務所なのです。なので、自分の意志で何かを選択する選択の権限というものが存在しません。食べ物も自分の食べたいものではなくて、そこで備えてくれたものを食べなければいけないし、ファッションなどありません。服も決まった服を着ないといけません。一日のスケジュールも自分がこれをやりたいあれをやりたいというように決められるわけではありません。刑務所で決めたスケジュールに従って生活をしないとダメです。そして、わずかなフリーの時間などもあるそうです。しかし、それにも多くの制約が付いてきます。寝る時も自由に寝られません。何時になれば強制的に消灯してしまい、朝は朝寝坊などはありえません。何時にみな起きないといけないし、歩く時にもこういう歩き方をしないとダメななど、さまざまなルールやいろいろな制約があります。なので、本当は人間なのですが、そこは人間の扱いをしないところでもあるわけですね。そして、その刑期によって早く出る人もそうじゃない人、色々いますけれども、無期の場合、また死刑囚は言うまでもないし、未来が不透明なんですね。いつどのようになるかが全くわからない。そして、何かがあるとしても、その後の展望がなかなか見られない。だから希望が全く持てないところとも言われています。ある意味、息をして生きてはいるのですが、その人の中ではもう人生おしまいじゃないのかと思うようなそういう状況、そのようなところなんです。なので、人それぞれでしょうけれども、だいたいその刑務所の中、その状況の中で

は、自分の今までの人生を振り返って後悔ばかりするしかありません。そして、何か、誰かに対して恨みを抱えて、心を苦しめられるような、そういう状況でしょう。そして、結局、こうしてもああしてもダメなので、落胆せざるを得ないし、ため息ばかりになるような、そういう状況です。人それぞれなのでしょうけれども、だいたいこういうふうに対応するしかないところが刑務所というところではないでしょうか。パウロも本当はいつこの刑務所から出られるか全く分からない。一生この刑務所に閉じ込められているかもしれない。そのような罪名でした。こういう状況にパウロは置かれていたので、先ほど申しあげました、そのような反応、そのような気持ちなどを持つのが普通だと思います。しかし、今日の聖書を見てもわかるように、パウロはこの刑務所という最悪な状況の中でも、一番先に神様の救いの祝福を感謝して、それを賛美していました。これがクリスチャンなのです。これが世の中の人とは全く理解できないクリスチャンの奥義であり、クリスチャンの在り方というものです。状況がどれほど酷いのか、どれほど見込みが見えるのか、希望が見えないのか、その状況の程度などと全く関係なく、その状況に左右されない、天にある霊的すべての祝福を頂いていることに間違いがないので、それを状況云々以前に真っ先に取り上げます。エペソの手紙、長い文章、長い手紙の中で一番先に書いたのが、キリスト・イエスの父なる神がほめたたえられますように。神様がキリストにあって天にある霊的すべての祝福を与えられて、私は祝福されたものなんだ。どこででしょうか？普通是最悪だと思うしかない刑務所のその状況の中で、パウロは神様の御名をほめたたえ、救いの祝福を感謝していました。ある意味、普通に考えると、『アホじゃないのか。今何やってる。お前、死ぬかもしれないよ。いつ出られるかわかんないよ』。そのように言われてもおかしくない光景ではないでしょうか。

2. パウロは刑務所という状況の中で、その状況に全く左右されない不動の祝福、それを心からほめたたえて、口ずさんでいました。

神の御子イエス・キリストの血潮によって私はきよく洗われきよめられているんだ。私の罪は全くきよめられて、それで私は創造主の神様の子どもになっているよ。刑務所の中でも私が神の子どもであることに間違いありません。キリストの十字架の血潮によって、私のすべての罪が完全にきよめられたということに変わりはありません。なので、私は祝福されたものなんだ。これは状況に左右されないものなのです。今まで私たちは状況によって自分の人生が左右され、状況によって幸せと不幸が左右されると、その法則以外に何も無い、その法則だけだと思ってその中を歩いてきて、それに慣れているものなのです。だからついついクリスチャンになったにもかかわらず、それに振り回されがちでありますけれども、パウロはクリスチャンらしい反応を示していました。ゆずりませんでした。刑務所であろうが、死の影の谷であろうが、そういうことと関係なく、私は幸いなものなんだ。なぜでしょうか。周りから見るとバカじゃないのかと言われるような、そういうことはなぜあるんでしょうか。バカなのか秘密を持っているものなのか、どっちかの一つなのです。天にある霊的すべての祝福、状況に左右されない、大学に落ちるか合格するかなどと全く関係ない不動の祝福。キリスト・イエスの中において、父なる神から与えられている天にある霊的祝福。状況などが奪うことができない祝福。その祝福の持ち主なんだ。私は神の子どもなんだ。これを変えることができないもの、誰も奪うことができないものにするために、エペソ 1:13 には聖霊をもって証印を押されたと言われていました。聖霊によって証印が押されて、聖霊が私の内側に入っている間でも離れることなく永遠にともにおられる、聖霊によって証印が押されている、判子が押されている不動の祝福なのです。誰が奪うことができるのでしょうか。何によって変わることができるのでしょうか。ありえません。パウロは刑務所の中でも、ある意味、刑務所がずっと下なのです。天にある霊的すべての祝福の持ち主としてサミットの上に立っているわけですから。聖霊によって証印が押されています。皆さんが自分の今の条件、またその日、その日のいろいろな状況、コロコロ変わるものによって、ついつい自分はこんなものなんだ、自分の人生こうだろうと気持ちがハイになったり、ローンになったり、いろいろなんでしょうけれども、それは騙されることなのです。ぜひ、それと戦ってください。それにも関わらず、私は天にある霊的すべての祝福を頂いて、聖霊によって証印が押されているものなんだ。つまり、私は神の所有なのです。誰も手を出すことができません。神の所有なのです。それが 11 節、14 節に書いてあります。それを別の言葉で神の相続と言います。神のすべての祝福が私のものなのです。どこででしょうか。刑務所の中。死の陰の谷を歩いている真っ最中に。これがクリスチャンなんです。これを一番先に取り上げて、その中に入るかどうかの戦いなんです。それでほめたたえて感謝しますと賛美している時に、殺されればどうなりましょうか。殺されれば結構なんです。これが順番なのです。何がどうであろうが、私たちは歯を食いしばってでも、自分の感情や自分の内側

にあるすべてを全否定してでも、天にある靈的すべての祝福。なぜでしょうか。キリスト Only ですから。キリストを見上げていないといけません。キリストが見えないとよろしい、よろしくない、いろいろなことが飛び交うでしょうけれども、目の前にキリストが見えないといけません。キリストを見上げていないといけません。そうすると、刑務所の中でも不動の祝福。神の所有、神の相続。短く申し上げましたけれども、これが世の中の人々が理解できない、不思議で不思議でしようがない、クリスチャンの自分が考えても訳わからないけれども『神様。どのようにして私に、私のような罪びとに、このような永遠のいのちの不思議な素晴らしい祝福が与えることができるのでしょうか』と疑うことではありません。驚くしかない祝福なのです。でもほとんどのクリスチャンが、その状況、状況に振り回されて、状況によってこの不動の祝福は全く無視して見えなくなり、目に見えないから大したものじゃないかのように思ってしまう。そこが失敗の理由なんです。このように天にある靈的すべての祝福、不動の祝福を頂いているわけなので、どのような状況の中でも、どんなに弱い人間でも関係なく、この世を生かすキリストのからだなる教会として派遣されるわけです。エペソ 1:23。そして、そのためにこの世にいる間に、私たちは血肉の戦いなどせず、そういうことを乗り越えて、靈的な戦いの主人公であり、その靈的な戦いに必ず勝利することができる権威と権限が授けられているものなのです。それがエペソの手紙の最後の6章の内容でもあります。

総合して申し上げますと、冒頭で叫んで賛美したように、私は幸いなものなんだ。私は幸せなんだ。状況がどうであろうが、そういう状況などによって、私の幸せは左右されません。私は昨日も今日も明日もどんな状況の中でも、状況がどう変わろうが私は幸せなんだ。私は幸いなものなんだ。これが悪魔が一番恐れる靈的な戦いの鍵です。ここがスタートです。このスタートを自分の体質にしていかないとはいけません。頭でわかっている、日々何も無いときからも口ずさんで、何かあるたびにこれを一番先に持ち出して、その後、聖霊の導きに従う、この練習をしていかないと身について、体質になっていかないとはいけません。それが自分の体質になった場合に、パウロのように、ダビデのように、最悪の状況なのに、主がほめたたえられますように。私は幸いなんだ。この状況と私の幸せとは全く関係ないと叫び、そして、そこからスタートすることができます。そこに光の門が開かれ、契約の旅程の門が開かれ、今まで見たことのない神様の導きが備えられているということがわかるようになるでしょう。自分の計算では到底絞り出すことができない答えがそこに見えてくるようになります。なので皆さん、暑い真夏のこの時期に、礼拝のために教会に来られました。真剣に自分自身に問いかけて点検してみましよう。私は幸せなのか。私にとって幸せと言えるその幸せの要素は何なのかということ素直に正直に検討してみてください。だいたい何かの状況によって幸せ、不幸というように考えているのではないのでしょうか。子どもが健康に、良い子、良い子として育てているから幸せでしょうか。そうでないと不幸になりますか。旦那さんがお金を稼いでお金を入れてくれて、浮気していないので、家事をよく手伝ってくれるから、だから私は幸せ。家にトラブル等なく、順調に進んでいるので、病気などもあまりしないし、だから幸せでしょうか。別にそれが悪いと言うつもりはありません。しかし、それが幸せの要素である限りは、幸せと不幸をいつも行き来する、本当の幸せでもない、特に靈的な戦いにおいて負けっぱなしの人生を送るしかありません。つまり、状況に振り回される人生を送るようになります。そこに何が期待できるのでしょうか。クリスチャンの目線で申し上げますと、とても格好悪いのです。格好良い人生になりません。信者の幸せ、幸せの要素は何でしょうか。その状況など地上にあるものではなくて、天にある靈的なすべての祝福、つまり、神様が私といつまでもともにおられること、それが幸せの最大の要素なのです。幸せのコンテンツがそこにあるわけです。クリスチャンになってから一番先にしないといけない項目がこれなのです。幸せの要素を取り替えることです。私たちは創世記 3:6-11 捕らわれていた奴隷だったので、幸せな要素もそこから全部導き出すわけです。それでは刑務所の中で私は幸せですよということはもうバカなのです。頭がいかれているからそう言うしかないのです。普通の人は、創世記 3:6-11 に捕らわれている人々からは理解できない幸せなのです。明日死んでも、死なないから幸せではありません。病気じゃないから幸せではありません。天にある靈的なすべての祝福、地上の状況に左右されない天にあるものが幸せのコンテンツなのです。それを自分の内側で素直に取り替えて、しかも刻印、根、体質になるように繰り返し、繰り返し、口ずさんでいかないとはいけません。そのために、この幸せの要素を確認して修正して、幸福タイムをみな持つようにいまいしょう。幸福のタイムはなんなのでしょうか。静かな時間を設けて、今まで私たちが当たり前前に創世記 3 章、6 章、11 章を中心にして幸せを組み立てていた、それを全部否定しながら、天にある靈的なすべての祝福を数えながら、自分が幸せなものだということを確認して感謝する時間、それが幸福タイムです。それが繰り返されることによって、わかっ

ていることではなくて、繰り返されることによって脳細胞に刻印されているものが変わって、不動の祝福が自分のものとして刻印されるようにしていかないとはいけません。なぜなのでしょう。もうすでにキリストの血潮によって、その幸せの主人公になっているからです。今皆さんに申し上げました内容の中で、聞いてない内容はほとんどないと思います。ただ、これが順番として第1だということになっていないと思うのです。その戦いです。今心配事などあるのでしょうか。何かの悩み事などあるのでしょうか。なぜ悩んでいるのでしょうか。もしかしたら。明日死ぬかもしれません。それで悩んでいるのでしょうか。それはクリスチャンとして申し上げますと、天にある霊的な不動の祝福を忘れているからなのです。そこに入れば明日死ぬというのは、悩み事にはならないと思います。別次元の話になります。今みなさんが心配してイライラしているその内容が、手にある霊的な祝福の中に入って、そこからスタートするとイライラする内容じゃなくて別次元の花この内容が変わってくるでしょう。それを勝利と言います。それを暗やみの悪霊の力が砕かれたと言うわけです。そこをただの理論ではなくて。そうすると皆さんは格好良いクリスチャンの人生を送ることができます。どのような状況でも、たとえ刑務所という最悪な状況であっても、私たちは契約の旅程、幸福の旅程を歩くようになります。歩く旅程、道が違います。暗やみの力が砕かれて、天の神の御国が臨まれることを目の当たりにするようになるでしょう。皆さんがこの祝福の主人公であることを改めて申し上げてお祈りをいたします。

(祈り)

イエス・キリストの血潮によって、罪きよめられ聖霊をもって証印が押され、永遠の命をいただいている不動の祝福の主人公であることを感謝し、主の御名をほめたたえます。どうかどのような状況の中においても、状況に対処する以前に、状況に左右されない不動の天にある祝福の中に入ることができるクリスチャンになるように、どうか聖霊様がひとりひとりをみことばをもって導き、守ってください。それでひとりひとりがみな格好良い契約の旅程、幸福の旅程を歩く人生になるように祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン